

---

# 僕と優菜の物語

sonick

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕と優菜の物語

### 【Nコード】

N2965G

### 【作者名】

sonick

### 【あらすじ】

飛行機事故で両親を亡くした主人公相澤純が医師となるために恋人金澤優菜とその両親、そして大学生活の中で1人の人間として成長していく話です。

## プロローグ

今朝は春先には珍しい、穏やかな朝だった。

いつもなら風が強く周囲の畑から強風に乗って

畑の土が飛ばされて

目も開けていられないって言うのに、、、

でも、こんな日があっても良いよな、、、

空は朝から雲ひとつ無い『快晴』という言葉ぴったりの青空

明日からは違う場所で

たった一人での生活が僕を待っている

今日は高校生活最後の日

【卒業式】って言うやつ

僕は荷物ひとつないがらんとした部屋の中に置かれた  
ひとつの写真立てに向かって

『父さん、母さん、、、それじゃあ行つて来るね

今日で僕の高校生活も終わるよ。

今日ぐらい、

父さんと母さんに僕の晴れ姿を見てもらいたかったな、、、  
三年間、苦労かけっぱなしだったからね、、、』

そう言って両親の写真に向かって手を合わせた僕は  
写真立てを折りたたんでバックの中にした。

僕は視線を部屋の中に移す、、、

僕が生まれてから今日まで住んできた家。

半年前までは僕と両親の三人で住んでいた。でも、夫婦2人で出掛けた旅行先で両親はこの世を去ってしまった。

両親が亡くなったという連絡を

僕は両親が亡くなってから二日後に知った、、

その当時の僕は

進学校に進学して上位の成績を常に収めていた。けど、

本当にこれで良いのかと

自分の生き方に疑問を感じて

父さんや母さんの言うことに対して耳も貸さないで中学のときの友達と遊び歩いていた。

もちろん無断外泊だっしてしていた。

その時も、

父さんと外泊の件で注意をされたのが気に入らなくて

『こんな家、出て行ってやる!』

と、啖呵をきって家を飛び出していた。

自分自身

今の自分の行動が正しいとは思ってはいなかったけど、どうしたらいいのかって言う方向性が見つけられなかった、、

そろそろ家に戻った方が良さなあと思っていた矢先、  
僕の携帯が着信を告げた

『もしもし？』

『おい、お前の親父さんとお袋さんが亡くなったって！  
それも、飛行機事故だって！お前、知っていたのか？  
親父さんとお袋さんが旅行に出掛けるってこと！  
とにかく家に戻れ！良いな！！』

それは、

なかなか自宅の電話に繋がらないことから、

従兄が僕の携帯に

両親が亡くなったことを知らせるために  
掛けて来た電話だった。

そんな、、父さんと母さんが死んだ、、？！

僕は咄嗟の事態の状況がのみこめなかった。

急いで家に戻ると、

そこにはさつき電話を掛けてくれた従兄が  
玄関前に立っていた。

従兄は僕の顔を見るといきなり僕の頬を殴った。

僕は身構える体勢も取れないまま、  
後ろに倒れていた。

口の中に血の味が広がる、、、、

『このバカ野郎！今までどこほつつき歩いてた！  
お前、身元の確認やらなんやらと大変だったんだぞ！  
なのに、一番居なくちゃいけない

【息子】

のお前がいなくてどういうわけなんだ！！』

僕はただ一言

『・・・ごめん・・・』

と言っただけだった。

言っただ途端、

急に僕の両目から、涙が溢れて

従兄にしがみ付いて、

それこそ小さな子供がすがり付いて泣くように、

僕は声を上げて泣いた。

『とにかく、家の中に入ろう、  
な、葬式の相談もあるし』

僕は頷いて家の鍵を開けて中に入った。

いつもと同じ家の中、、、

でも、そこには

『お帰り！今日も暑かったでしょ。  
麦茶が冷えてるわよ！』

そう言ってくれる母さんの姿はどこにも無い、

『おう、夕飯準備が出来てるぞ！  
父さんか？』

今日は早く仕事が終わったんだ。

たまには三人一緒に夕飯もいいだろ？

だから、

お前が帰ってくるのを待っていたんだ。

カバンを置いて早く来いよ』

あの日、

珍しく早く帰れたからといって、

ニコニコと

笑顔で声を掛けてくれた父さんの声だけが、

僕の耳の中で繰り返し聞こえていた。

居間のテーブルの上には、

母さんの字で僕に宛てたメモが残されていた。

『お父さんと旅行に行つて来ますね。

毎年恒例の結婚記念日の旅行です。

本当は、

行く前の日に

あなたとあんなことになってしまっていたから

どうしようか悩んだんだけど、

今更キャンセルと言うわけにも行かないので

お父さんと話し合つて行く事にしました。

もう高校3年生だから

一人でも留守番は大丈夫よね。

では、行って来ます。

母より』

僕の頭の中は、  
現実を現実として受け止めることを  
拒否しているようだった。

これは何か夢の中の一場面なんだ。  
きつともうすぐ母さんが僕を起こしにくるんだ。  
いつものように、

『もう時間よ、起きなさい』  
つて……

従兄は、  
僕が呆然と立ちつくしている中をてきぱきと、  
親戚中に電話を掛けて  
葬式の段取りを取っていた。

その日から  
いわゆる『初七日』が終わるまでは  
人の出入りもあって  
『喪主』の僕は弔問客に対して  
挨拶をするという役目を  
ただひたすらこなしているようだった。

『初七日』も済んで、  
最後まで僕のことを心配して残っていてくれた従兄も  
自分の家に帰ってしまうと、  
途端に家の中が寂しくなってしまった。



祭壇のところに置かれた  
両親の遺骨の入った白い布で包まれた箱が二つ、  
生前の両親の仲の良さを表すように、  
仲良く並んで置かれている。

それを見ながら

『父さん、母さん、、、  
僕は独りぼっちになってしまったよ、、、  
どうして僕を置いて逝ってしまったんだよ、、、  
僕はこれからどうしたらいいんだよ、、、』

『お前は決してひとりじゃないさ。  
俺と母さんだつて

何時だつてお前の傍にいるさ！  
それにな、

自分から近づいていかなければ、  
相手だつて近寄ってきてはくれないぞ。  
学校の先生にだつて、

お前から近づいていってみるんだ。  
先生、教えて欲しいんだつて！  
きつとお前の力になってくれるはずだ。

それに親戚のものに対しても同じだぞ。  
今までのことを改めて、  
お前から助けを求めていくんだ。  
そうすれば、

誰かしらお前に知恵を与えてくれるはずだ。

心配するな！

俺と母さんの兄弟姉妹たちだ。

俺の、父さんの言うことを信じる。

いいな』

僕はいつの間にか眠ってしまっていたようだった。

父さんの声に、

言葉に、

僕は眼が覚めた。

その日から、

僕は、今までの生活を改めて、

先生に、

叔父さんや叔母さん達に相談をして

自分の高校卒業後の進路を決めることにした。

僕は高校卒業後は就職をして、

一日も早く自立をしなくてはと考えていたけど、

担任の先生や従兄の

【初志貫徹】

という言葉を聞いて、

高校入学当初の希望でもあった

医者を目指すことにした。

でも、

私立の医科大学なんて

費用の面でもにもならない、、、、

ならば国公立ならば費用は安いし、  
奨学金で何とかかなりそうだといいことで、  
僕は、国公立の医学部を目指すことにした。

だけど、

この時期から本格的に始めるといふのは、  
物理的に無理なことは  
僕もうすすず感じてはいた。

だけどやりもしないで  
はなっから諦めることは、  
僕には出来なかった。

両親のこのように、  
後になって後悔をするということとは  
もう二度と味わいたくなかったから、、、

1月のセンター試験で、  
僕はどうにか一次選抜  
いわゆる『あしきり』を合格できるだけの成績を  
取ることは出来た。

そして迎えた、前期試験、、、

3日間の試験日程を全て終えて、  
後は結果を待つばかりとなっていた。

そして結果発表の日、

『もしもし？』

うん、、、、うん、、、、うん、、、、ありがとう、、、  
ございました、、、』

それは

受験大学のすぐ近くに住む叔母からの電話だった。

僕は、

無事に

希望通りの第一志望の国立大学の

医学部医学科に合格することが出来た。

その大学は、

僕の両親が二人揃って眠る、

菩提寺のあるところの県にあった。

菩提寺は海を隔てたところに在るけど、

晴れているときは、

海岸からその島を見ることが出来るから、、、

僕は卒業式の間、

この半年間のことを思い出していた。

在校生の送辞のあと、

卒業生代表による答辞が読まれた。

そして卒業生一同による合唱。

練習のときにはそれ程感じなかったのに、  
今になって歌詞の意味が  
僕の胸の中に染み渡る、、、

『 兎追いしかのやま

小鮒つりしかのかわ

夢はいまもめぐりて

忘れがたき 　ふるさと、、、  
』

不意に僕の頬を涙が伝う、、、

ぬぐってもぬぐっても

涙をとめることが出来なかった、、、

『 仰げば尊し 』

『 蛍の光 』と曲は進む、、、

そして在校生による

『 旅立ちの日に 』

によって僕ら卒業生は体育館を後にした。

校庭では同じクラスの女の子達が写真を撮ったり、好きな男の子の第二ボタンを貰おうと、体育館の中の時と違って、キャアキャアと騒いでいた。

僕はそんな同級生達の様子を  
眼に焼き付けるかのように見つめていた。

『あの、、、私、、、ずっとあなたに憧れていました。  
いえ、今も憧れているんです。  
でも、

卒業してしまうともう逢えなくなってしまうから、、、  
あの、、、  
思い出に、、、制服の第二ボタンをくれませんか？』

それは隣のクラスの女の子だった。

『別に構わないよ。ちょっと待ってて』

僕は制服の第二ボタンを手で引きちぎって渡した。

『はい、これでいいかな？』

『ありがとう、、、あの、、、大切にします。  
それから、、、大学生生活頑張ってください。』

その子は、  
瞳に涙をいっばいに溜めながらお礼を言った。  
一緒にいた友達が

『良かったね。』

ねえ、あれもお願いしてみたら？』

『ええ、いいわよ。これだけで十分なもの、、、』

『あれって何？』

僕は2人の会話が気になって尋ねた。

『あの、、、名札、、、』

『ああ、これ？いいよ。ハイ』

僕は

【相澤 純】

と書かれた名札を渡した。

『本当に本当にありがとう！』

『君も新しい生活、頑張れよ』

『ハイ！』

『純、やっぱりお前も第二ボタンを取られたな』

そう言いながら近づいてきたのは  
親友の俊だった。

『お前だってそうだろう』

『純、

向こうに行っても、たまには連絡をしるよな。  
俺達はいつまでも友達だからな。  
何かあればいつでも力になるから！』

『ありがとう、、、』

その言葉に、  
僕は涙が頬を伝うのがわかった。

『泣くなよ！  
それと、、、』

やっぱり今日のクラスの打ち上げには出ないのか？』

『悪いな、、、新幹線の時間があるから、、、  
皆にはよろしく伝えてくれよ』

『、、、わかったよ。ちょっと待ってるよ。  
おーい、ちょっと皆集まってくれよ』

『なんだ、、、』

『どっつしたの？』



『純が今日の打ち上げには出れないって言うからさ、  
今、ここで、』

クラス全員で記念写真を撮ろうぜ!』

『純、来れないのか?』

『え、相澤君来ないの?』

『そういつこと!』

さあ、早く皆並んで!

もちろん純が真ん中だぜ!』

『あ、あたし相澤君の隣とった』

『女子は後ろだよ!』

俺達が純の隣に決まってるだろ!』

『そんなあ!』

相澤君だって隣りが女の子の方が嬉しいわよねえ!』

『ああ、もう時間がないんだから、早く早く!』

僕はクラスメイト達の心使いが嬉しかった、、。

『よし、皆並んだか?』

悪い、シャッター押してくれない』

親友の俊が近くにいた他のクラスの生徒に、  
カメラのシャッターを押してくれるように頼んだ。

『おい、  
純の隣りは親友の俺に決まってるだろう！  
みんな、いいかあ？チーズ！！』

『チーズ！！！！』

『カシヤツ！！！！』

シッターの音がする。

『純、頑張れよ！！』

『相澤君、頑張つてね？』

皆が口々に僕へのエールを送ってくれた。

『ありがとう！！』

『純、身体に気をつけるよ！！』

そういった俊の目が涙に濡れていた。

『うん！俊も、、、』

僕は後ろを向いて正門へと向かって歩き出した。

僕の背後でクラスメイト達の声が聞こえる、、、

僕は泣き顔を見られたくなくて、  
右手の拳を上へと挙げてみんなの声に応えた。

これからの僕の未来を見つめて、

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2965g/>

---

僕と優菜の物語

2010年10月17日19時35分発行